

L. B. Alberti とイタリア語の最初の文法書

L. B. Alberti e la prima grammatica italiana

菅田 茂昭
Shigeaki SUGETA

1. ダンテの『俗語論』がイタリアの言語問題を論じてからこんにちの標準イタリア語が成立するまで、イタリア半島は、ラテン語対俗語、トスカーナ語（方言）対それ以外の諸方言という2種類の関係が絡み合うなかに置かれてきた。Leon Battista Alberti (1404-1472) が生まれた1400年代の前半は、それまで文学語として高められつつあった俗語が、人文主義のラテン語のまき返しにより苦境に立たされ、いわゆる言語危機を告げる時代であった。もちろん日常語としての俗語は、行政、事業、通信などの要求に応じて、伝統的なラテン語に代わってその地盤を固めていたのであるが。このような状況下において、L. B. Alberti は L. Bruni (1370-1444) などとともにラテン語をモデルとした俗語を選ぶ僅かな学者のひとりであった。1400年代も後半に入れば、ラテン語と並んで M. M. Boiardo (1441-1494), A. Poliziano (1454-1494), J. Sannazzaro (1456-1530) など俗語を幅広く用いる学者が出ている。やがて1500年代は、N. Machiavelli (1469-1527) をはじめとして、B. Castiglione (1478-1550), G. F. Fortunio (sec. XV-1517), P. Bembo (1470-1547), P. Giambullari (1495-1555), G. G. Trissino (1478-1550) など言語問題に取り組む学者が現れ、イタリア語の初期の文法書が相次いで世に出、1583年にはクルスカ学会が設立され、トスカーナ語（方言）がイタリア語としての地位を確立する世紀となった。

2. 理論と実践の両面における天才建築家（cfr. *De re aedificatoria* 1450, *S. Maria Novella, facciata* など）であり、数学者、さらに *Della famiglia* などの著作で知られる Alberti は、生まれはジェノヴァと伝えられるが、フィレンツェの家系で、Eugenio IV (1383-1447) と Niccolò V (1397-1455) に仕え、フィレンツェとローマを中心に活躍した。

ここでは彼の *Regole della lingua fiorentina* を、イタリア語の最初の文法書としてとりあげてみたい。残存する写本は、Bembo によるものとされ、ヴァチカン図書館に保管されているため、*La grammaticetta vaticana* (cod. Vat. Reg. Lat 1370) と呼ばれているものである。この文法冊子は、1495年のメディチ家の図書目録に記されていたことが知られたが、その後流布した Bembo の *Prose della volgar lingua* の陰に埋もれたためか、長い間顧みられなかった。ヴァチカン図書館でもラテン語の写本、しかも *De Vulgari eloquentia* の写本に作者も知られず連結して保管されてしまった。前世紀半ばに発見され、ようやく今世紀はじめ Trabarza がその *Storia della grammatica italiana* に著者不詳のまま付録として出版した。しかしながらこの文法冊子の十分な評価と作者の同定には、まずは C. Grayson の研究 (1955, 1964), さらに C. Colombo の論文 (1962) などを待たねばならなかった。というのは、今世紀半ばすぎに出版されたイタリア語史を代表する著作、すなわち G. Devoto (1953), B. Migliorini (1960) においても、後者がこの写本の最初の頁の写真を一枚載せ、ようやくその作者を Alberti に帰している状況であったからである。F. Montanari-L. Peirone (1975) においても、他の文法冊子の内容には触れているものの、Alberti についてはその名を挙げるにとどめている。M. Fogarasi (1990²) にいたると、この文法冊子に一



Bourdillot

Ve che affermano la lingua latina non essere
 stata comune a tutti i popoli latini, ma es-
 sere stata di certi volti scolastici, come ho già in veduto
 in pochi; credo de' vostri quello errore; e scendo
 questo vostro opuscolo in quale io raccolgi l'uso del
 la lingua nostra in brevissime annotazioni; qua' cosa
 simile fecero i linguei grandi e studiosi presso a
 greci prima, e po' presso de' latini; e chiamano
 queste simili ammonizioni, non a scrivere e' anel-
 larci senza correptione, suo nome Grammatica, que-
 sta arte anche ella si chiama in lingua nostra Gram-
 matica, e intenderebbe.

Ordinazione delle lettere

a	b	c	d	e	f	g	h	i	k	l	m	n	o	p	q	r	s	t	u	v	w	x	y	z
...

節が与えられているといった具合である。

以下この文法冊子をめぐる問題に、日本ロマンス語学会第29回大会 (16. 5. '92) 発表要旨に基づき、大きく二つの面から簡潔に触れてみたい。第一は、この作品がたどった運命から生じる問題、すなわち作者、書かれた年代の究明である。第二は、この作品の内容にかかわる問題であり、ここでは再評価の必要性を指摘したい。

3. この文法冊子を最初に公刊したのは Trabalza (1908) であった。イタリア語文法の歴史上 «un documento molto interessante» とし、《作者不詳》のまま付録に加えたのである。Grayson (1964) によれば、すでに当時 Lorenzo de' Medici 作を主張する L. Morandi に対して、F. Sensi が文献学的な見地から、たとえば Alberti の *De Cifris* (1466年頃) の中に文法冊子への言及と解釈しうる1節があることを挙げて、L. B. Alberti の作としていたという事実は注目に値する。しかしながら C. Colombo による正書法の比較研究、C. Grayson による語法、語彙などに基づく総合的な研究により、資料発見から1世紀を経てようやく Alberti 説が広まり、こんにちではほと

んどの学者の一致した見解となっている。

この作品を Alberti に帰する有力な根拠として、正書法のレベルでラテン語表記法がすでに俗語の表記には通用しないことを指摘し、母音 e に対して接続詞、冠詞、動詞の場合に応じた表記法上の工夫、e と o の広母音と狭母音の区別、c と ch, g と gh の区別など、他の作品からも裏付けられる彼特有の表記がある。またすでに他の作品にみられる彼特有の語法がこの文法冊子のなかにも見いだされる事実がある。たとえば *resta a ...* 「残るは…することである」といった表現、*congettare* 「仕上げる」のようにクルスカ辞典、Tommaseo-Bellini 辞典にも収録されていない彼特有の動詞の存在があげられる。

書かれた年代についても、ことに言語問題にも係わりをもつ時期、すなわち俗語による *Della famiglia* の執筆、詩の競技会 *certame coronario* (1441) を開催した、フィレンツェ滞在中 (1434-1443)、あるいはローマで過ごしたその直後あたりと推定される。結果として Alberti の文法冊子が A. Nebrija (1441-1552) のスペイン語文法 (1492) におよそ半世紀先立つことになる。とはいえ Nebrija がポローニア留学の際、この文法冊子に触れたという証拠を探すのは、その後のこの作品の運命からも察せられるように困難であるうえ、両作品に類似する傾向も見受けられない。

4. Alberti の文法冊子は、16枚 (mm210×147) からなる簡潔なものであり、したがって全容を容易につかむことができる。序文のあとに、文字一覧表、母音がつづき、名詞 (ラテン語の奪格から導かれる) の性・数・格の区別、代名詞、数詞、動詞、間投詞、接続詞について述べ、結語で終わっている。内容の細部は Grayson 版 (1964) にゆずるとして、ここではこの文法冊子の存在価値を改めて考慮し、今後これまでに以上に再評価されることを期待したい。

まず全体として、Alberti の文法は、これより半世紀以上遅れ、1500年代前半に続出する文法 (規則) 書のいずれも、各地域の俗語のトスカーナ語化への意識の高まりとともに、Dante, Petrarca, Boccaccio など過去の言語を規範とする文法であったのに反し、当時のフィレンツェの生きた言語を対象とする文法であったことを重要な特徴としている。

序文のことは «Que' che affermano la lingua latina non essere stata comune a tutti e populi latini, ma solo propria di certi dotti scolastici, come oggi la vadiamo in pochi, credo deporranno quello errore vedendo questo nostro opuscolo, in quale io raccolti l'uso della lingua nostra in brevissime annotazioni» からは、かつてラテン語が、一部の知識人のみのものでなく、すべてのローマ市民に共通のことばであったごとく、当時のフィレンツェのことばもイタリア半島に通用することばであるという認識が、Grayson (1964) も指摘しているように、確かに読みとれる。だが、同時に (知識階級の) ラテン語対俗語の関係を、単純に文字言語対音声言語の関係に置き換えたり、あるいは俗語はラテン語のくずれた形と見なす見解を戒めることばでもあったと解釈すれば、俗語自体がかつてはローマ市民一般に通用したラテン語の末裔であることを暗に述べていることになり、Alberti こそ19世紀のロマンス語比較言語学者の先駆者のひとりとも呼べるかも知れない。

さらにこの文法冊子は、1300年代の文学語を規範とせず、同時代の生きたことばを対象としたという点では、記述文法の先駆的存在ともいえる。たとえば、名詞の格は冠詞 (といっても具体例は前置詞付き) で示されるとする。直接法現在 3 人称・単数の形成には、現在分詞から -ndo を抜き取る操作 (*amando, scrivendo ...* > *ama, scrive ...*) が伴う。トスカーナ語には受身形が存在せず、その代用形が動詞 (*sono ...*) + 過去分詞である、という説明にいたっては、20世紀の文法書かと思間違うほどである。ことに注目されるのは、ラテン語文法にモデル

のない文法用語に関してである。たとえば条件法に対して *assertivo* という用語が与えられている。また当時ラテン語教育が俗語で行われたことから必然的にラテン語文法用語の俗語化が進行したが、Alberti はその先駆者ともいえる。

5. さいごに残念なことは、この写本が、その運命が語るように1500年代前半の言語問題に係わることもなく、長い間知られずじまいとなったことである。とはいえ文学的な規範を求めるのではなく、民衆の生きたことばの記述文法を試みた彼の態度は、これを手にしたと考えられる Bembo にも影響することなく、しかも *Prose* の方が言語問題の主役を占めるに至ったことを考えると、余りにも時代に先んじていたのかも知れない。

しかしながら Alberti の文法冊子は、建築家の視点から、20世紀のことばでは構造主義的とさえ呼びうる特徴を部分的には備えているといえる。Alberti がここにちの標準イタリア語文法の形成に貢献した最初の学者としてこれまで以上に評価されるべきであろう。

ローマの建築家 Marcus Vitruvius Pollio (BC 1 世紀) は、*De Architectura* において «Non architectus potest esse grammaticus» と建築家は、文法家としては (文学ラテン語の規則には) 自信が持てないことを告白している。Alberti の方は建築家であったからこそ、すぐれた文法家たりえたといえるように思われる。

参考文献

- Colombo C., 1962. *Leon Battista Alberti e la prima grammatica italiana* [Studi linguistici italiani vol. III]
Devoto G., 1953, *Profilo di storia linguistica italiana*, Firenze.
Fogarasi M., 1990², *Nuovo manuale di storia della lingua italiana*, Firenze.
Grayson C., (a cura di) 1964, *L. B. Alberti: La prima grammatica della lingua volgare*, Bologna.
Grayson C., 1955, *Appunti sulla lingua dell'Alberti* [Lingua nostra, vol. XVI. Fasc. 4]
Migliorini B., 1960, *Storia della lingua italiana*, Firenze.
ID., 1975, *Cronologia della lingua italiana*, Firenze.
Montanari F. -Peirone L., 1975, *Lineamenti di storia della lingua italiana*, Firenze.
Trabalza C., 1908. *Storia della grammatica italiana*, Milano.
Väänänen V., 1982³, *Introduzione al latino volgare*, Bologna.